巻頭特集

浜松ジュニア音楽の世界

響け、心のハーモニー

「浜松国際ピアノコンクール」などを通じて、音楽のまちとしての知名度をますます上げている浜松。その〝音楽熱〟は全世代の市民に広がり、とくに子どもたちの音楽活動には目を見張るものがあります。今回はそうした中から、オーケストラ、合唱、ミュージカルに取り組む子どもたちの姿を紹介しましょう。

オーケストラ

ジュニアオーケストラ浜松

ジュニアクワイア浜松

合唱

多くの人々に支えられ、みんなの心に花は咲く

ステージでは歌うだけでなくダンスも披露します

温かな陽光に誘われて色とりどりの花が咲き始める3月、ジュニアオーケストラ浜松とジュニアクワイア浜松の合同演奏会「スプリングコンサート2018」が開かれました。会場は客席2000を超すアクトシティ浜松大ホール。その格調高いステージいっぱいに、小学校3年生から高校2年生まで、総勢184名の子どもたちが勢揃いします。

舞台前方には、鮮やかなライトグリーンの衣装で元気よく歌うジュニアクワイア浜松の団員たち83名。その後方では、白いシャツ姿が凛々しい、ジュニアオーケストラ浜松の101名の団員たちが並びます。オーケストラは、弦楽器、金管楽器、木管楽器、打楽器などによる本格的な構成。音楽が大好きな子どもたちは、毎週末、一生懸命に練習してきた成果を、これまで応援してきてくれた家族や友人たちに披露します。

このコンサートが開かれた3月11日は、奇しくも東日本大震災の発生日と同じ。7年前の合同コンサートでは、公演の目前に震災が起こりました。自粛ムードの中で開催は危ぶまれましたが、「少しでも復興の力添えになれば」と、全員黙祷の後に演奏を始めたといいます。

今年のコンサートでもプログラムの最後に、あの日を忘れないようにと復興支援ソング「花は咲く」を選曲。オーケストラもクワイアも一つになり、心を込めて演奏・合唱しました。オーケストラの優しい音色と子どもたちの澄んだ歌声が会場に響き渡り、客席から見守っていた大人たちの心も癒されていきます。曲が終るや否や、湧き起こる拍手喝采。音楽の持つ力の大きさを改めて感じる、感動の瞬間でした。

こうしたジュニアオーケストラ、クワイアの歴史は古く、今から54年前、市の音楽のまちづくり推進事業の一環として1964年にスタートした「児童会館少年音楽隊」が前身です。

緊張しながらも、みんなの気持ちを一つにして美しい音色を届けます

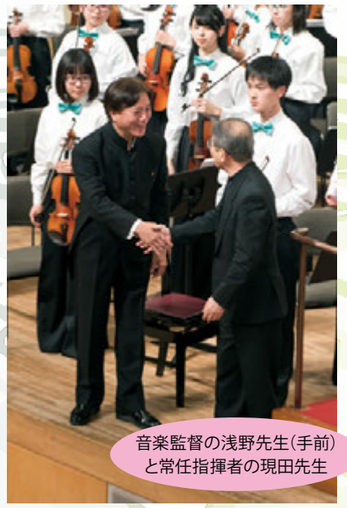
クライマックスは、オーケストラとクワイアによる総勢約200人の合同演奏

音楽を通じて感性豊かな青少年の育成を図り、市民の音楽に対する理解を深め、浜松市の音楽文化の振興を推進することが目的です。

そして、1993年にジュニアオーケストラ浜松、ミュージカルクワイア浜松が設立され、2001年にはミュージカルクワイア浜松がジュニアクワイア浜松に改名されました。発足当時から楽器演奏と合唱の両方の指導に力を入れ、2004年には朝日新聞社の「音楽教育振興賞」を受賞。こうした取り組みは全国的にも珍しく、「先進的な事例として、ぜひ参考にしたい」と、他県から見学に来るケースもあるそうです。

現在、オーケストラ、クワイアとも浜松市文化振興財団が運営し、指導には実績と経験、そして何より子どもたちへの愛情と情熱を持った多彩な先生方が当たっています。クワイアは、浜松学院大学短期大学部名誉教授の浅野武先生が音楽監督を務め、指導員4名、特別指導員1名により、83名の団員を教えています。一方、オーケストラは、名コンダクターとして国内外で活躍する現田茂夫先生を常任指揮者とし、指導員11名、特別指導員5名の下、101名の団員が研鑽を重ねています。

今年の合同コンサートのプログラムは、第一部がジュニアクワイア浜松の合唱です。オープニングは、東日本大震災を体験した福島の中学生の気持ちを元に作詞された「群青」。そして、作曲家・宮川彬良氏の作品の中から7曲、そして東北出身の宮澤賢治の詩による「雨ニモマケズ」と続きました。



音楽監督の浅野先生(手前)と常任指揮者の現田先生

クワイアの音楽監督として今年20年目の浅野先生は、ヨーロッパで音楽教育を学んだ経験を活かし、子どもたちと接しているそうです。「ヨーロッパでは、とにかく子どもをほめます。人間はほめた方が伸びますからね」と浅野先生。そして「歌には大切な〝言葉〟があります。歌で表現される言葉の一つひとつと、それらの言葉が奥に秘めているメッセージ。これを感じ取れるような感性を育てたいと思っています」。

浅野先生がそう述べる通り、子どもたちは表情豊かに生き生きと、豊かな詩の世界を美しいハーモニーに乗せて届けてくれました。

続いて第2部はジュニアオーケストラ浜松の出番。モーツァルトの歌劇「魔笛」序曲、チャイコフスキーの「スラブ行進曲」、そしてメンデルスゾーンの組曲「夏の夜の夢」より序曲・スケルツォ・間奏曲・夜想曲・結婚行進曲という、本格的なプログラムです。

指揮者の現田先生は、千葉県のジュニアオーケストラ出身ということもあり、ご自身の子ども時代の経験を団員たちによく話すそうです。「選曲する時に、子ども用という選び方はしていません。私が中学生の頃、先生からこう言われました。『ベートーベンに大人用も子ども用もない。出すのは〝ベートーベンの音〟しかないんだよ』とね。今回の『夏の夜の夢』は、大人がやっても難しい曲です。だからこそやりがいもあ

るし、楽しみでもあるんです」。

ジュニア音楽の大先輩である現田先生の期待に応えようと、真剣に演奏する子どもたちの姿は、とても頼もしく見えます。

オーケストラの団員代表、高井さんはチューバ担当

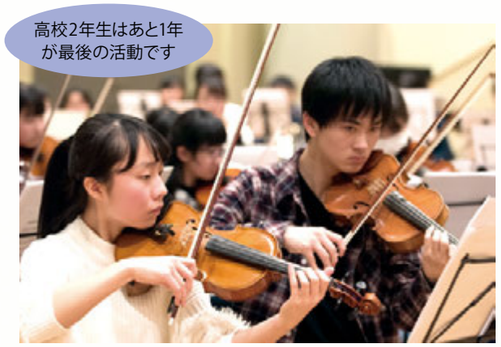
さて、ここからはオーケストラとクワイアの普段の活動をご紹介しましょう。定期練習は毎週土曜日に行われ、加えて演奏会前の特別練習と夏季合宿練習があります。コンサートは、3月の「スプリングコンサート」と9月の「定期演奏会」の年2回。このほか、演奏依頼によるステージが年数回行われます。

募集対象は、オーケストラ、クワイアとも小学校3年生から中学3年生まで。「挨拶がきちんとできること」「練習に熱意をもって参加できること」などの条件をクリアすれば、初心者でも大歓迎です。活動は高校3年生まで続けることができ、練習は基本的に全員一緒です。

101人という大所帯のオーケストラをまとめるのは、今年の団員代表である髙井宥惟さん。小学校5年生で入団し、今年7年目の高校2年生です。中学からは家庭の都合で愛知県岡崎市に引っ越しましたが、その後もオーケストラに参加するため、浜松まで通い続けているといいます。

「入団して、音楽の楽しさを教えてもらいました。いろんな地域から集まる子たちと仲良くできるのも楽しみです。最初の頃は、現田先生の説明が少し難しいと思ったんですが、今ではとてもわかりやすく、イメージを膨らませやすいんです」。

小柄な髙井さんが担当するのは、何と金管楽器の中で最も大きく、最も音域の低いチューバ。「オーケストラでは目立たない存在かもしれませんが、弦楽器にないパワフルな演奏ができるんですよ」と、誇らしげに語ります。


高校2年生はあと1年が最後の活動です

また、常任指揮者の現田先生は、音楽を学ぶことの魅力を次のように語ります。「音楽は直感やひらめきを司る右脳をフルに使いますし、楽譜を覚えることで記憶力を鍛えることもできます。レオナルド・ダ・ヴィンチが美術、科学、音楽などあらゆる分野で卓越した才能を発揮したように、人間としてのトータルバランスを整えるためにも音楽は重要。オーケストラを通じて、音を楽しむ、音とうまく遊ぶ環境を、多感な子ども時代に作ってあげられたら、と思っています」。

一方、クワイアの団員代表・野呂なつみさんも高校2年生。小学校4年生で入団しました。「市の音楽発表会の合唱に参加して、『ハモるのって素敵だな』と思ったんです。入団したら、歌だけでなくダンスもあって、さらに楽しく感じました。合唱はみんなで歌うことで、心が一つになるところがいいと思います」。

この楽しい雰囲気こそ、音楽監督の浅野先生の狙いです。「合唱というと、これまで列になってピリッとした緊張感に包まれた中で歌うイメージがありました。でも今は、伸びやかに楽しくやれたらと思っています。楽しさの中から本当に美しいハーモニーが生まれた時、何とも言えない気持ちよさ、心の高ぶりを感じられるんです。もちろん、発声の基礎をきちんと教えることは最も大切。声を出すというのはのどを響かせることだと思われがちですが、歌うことで一番大切なのは〝息の流れ〟です。のどで頑張らないで、腹筋で声をコントロールするんですよ」。まさに体全体を楽器にするイメージです。

発声の基礎はブレスのコントロール

これに対し代表の野呂さんは、日頃、団員として心がけていることを教えてくれました。「まず笑顔を絶やさないこと。そして、お客様と一緒に自分も楽しみたいと思うことです」。少しはにかんだ笑顔の中に、パフォーマンスへの強い責任感と決意がにじみます。

コーラスの魅力は笑顔と、みんなで一つになる美しいハーモニー

コンサート目前に合同練習するオーケストラとクワイア

コンサート当日、舞台裏では出演する団員たちに交じって、多くの若いスタッフが裏方仕事に走り回っていました。彼らは全員、かつて同じようにステージに立った経験のあるOB・OGたちです。大学生や社会人になった今も、かつて音楽を学び、仲間とともに歌い演奏する喜びを知った現場を、心から応援し続けているのです。

練習では、音を楽しむための環境づくりを重視します

オーケストラやクワイアを卒団後、音大やミュージカル劇団など、本格的に音楽の道へ進んだOB・OGも少なくありません。それだけに、先生方は子どもたちの可能性を大きく広げるため、しっかりした基礎を教えることを最も大切にしています。その上で、子どもたち自身が悩み苦しみ、様々な経験を積むことで〝何か〟をつかむ。そうした中から、次世代を担う若き音楽家が巣立っていくと期待できるのです。

こうした「音楽のまち」ならではの環境の下、良き指導者と出逢い、音楽活動を支えてくれる多くの人たちにも恵まれた子どもたち。これからも素直な心と音への飽くなき情熱で、素晴らしいハーモニーを奏で続けてくれるでしょう。

「ハモるのが楽しい」と話す、団員代表の野呂さん

モダンダンス、ミュージカル

MIBUワークショップ

ふるさとへの想いを歌と踊りに乗せて

緑豊かな森林と天竜川の清流に恵まれた天竜区二俣の地に、2002年開館した「浜松市天竜壬生ホール」。天竜材をふんだんに使用した長円形のホールが印象的で、地域のシンボル的存在です。2003年、ここを拠点に一つのワークショップがスタートしました。地元の小中学生に質の高い芸術文化を体感してもらおうと、様々な活動を展開する「MIBUワークショップ」です。2005年に浜松市と旧天竜市が合併してからは他地域からの参加者も増え、毎年、150人以上の子どもたちが参加しています。

現在、ワークショップには、ミュージカルとモダンダンスの2部門があります。ミュージカル部門の講師は芹澤文子先生、モダンダンス部門の講師は太田良子先生。お二人とも地元・天竜区出身で、ワークショップ立ち上げから指導に携わり、今年で15年目になります。今回はミュージカル部門の稽古場を訪ね、子どもたちが歌や踊りに取り組む様子を取材させていただきました。

歌もダンスもパワフルに指導する芹澤文子先生

「それではみんな、鏡の前に整列して!」。壬生ホール内の広々とした稽古場に、芹澤先生の張りのある声が響きます。そこからスタートするのは、柔軟体操、発声、歌唱、ダンスのレッスン。すべてはスピーディーに展開され、子どもたちを飽きさせることはありません。レッスン時間は90分ですが、芹澤先生はノンストップでパワフルに指導します。対する子どもたちは、全体的にリラックスした雰囲気。自然に笑顔もこぼれますが、ここぞという時には表情をきりりと引き締め、しっかりと先生の指導について行きます。

レッスンは、月に2回、土曜日に行われ、小学1年生から5年生までがAクラス、小学6年生から中学3年生までがBクラスと分かれています。Aクラスのレッスンでは、Bクラスの先輩たちがアシスタントとして加わり、先生をフォロー。まだ入って間もない子どもでも、先輩のアシストで安心してレッスンに参加することができるのです。

こうしたきめ細かな指導を積み重ね、MIBUワークショップではこれまで、数々のミュージカルを上演してきました。2003年から毎年1回のペースで上演し、オリジナル作品は9作にも上ります。代表的な作品は「森のてんぐ屋さん」「かさこそ森の気取りやキツネ」「HEAVEN or HELL」など。

それらの作品のほぼすべてで、脚本・演出、振り付け、歌唱指導を担当しているのが芹澤先生。まさにオールマイティーの指導者といえるでしょう。「私はもともと、ヤマハ音楽教室でミュージカルを指導していました。もちろん、それはやりがいのある仕事ですが、MIBUワークショップがスタートした際『これからは地元のために一肌脱ごう』と心に決めたんです」。

芹澤先生の願いは、生でミュージカルを観たことのない子どもたちに、歌と踊りとお芝居の豊かな世界を体感させてあげること。そして、ミュージカルを通して、ふるさと天竜の素晴らしさを子どもたちの心に深く刻み込むことです。

「天竜の子たちは、純粋で自由。レッスンのちょっとした合間に、友だち同士でじゃれ合ったりして、本当に自由なんです(笑)。でも、そんな自由な感性が舞台で生きてくることもありますからね。そこを演出に活かそうと心掛けているんです」

そんな先生の指導を、子どもたちはどう受け止めているのでしょうか。昨年12月上演の「Down Town Story!!」で主役を演じた、中学1年生の末永和花さんに伺ってみましょう。「私は小学校1年生からワークショップに参加していますが、芹澤先生は昔の方が怖かったですね(笑)。熱心さとパワフルさは今も変わりませんけど。先生のレッスンを通じて、私はミュージカルが大好きになりました。いつかプロになるのが夢です」と、目をキラキラさせながら語ってくれました。

天竜の豊かな自然と文化に育まれ、伸び伸びとしたレッスン環境で表現力を磨く子どもたち。その中から、未来のミュージカルスターが羽ばたいていくことも、決して夢ではなさそうです。

体全体を使って表現するモダンダンスの舞台

ミュージカルの基本である発声練習をしっかり行います

年長の生徒のリードで、小さな子たちも懸命に踊ります

輪になって、みんなの顔を見ながらセリフの稽古

昨年12月の舞台「Down Town Story!!」の1場面。前列中央が主役の末永和花さん